

日本版デンバー式発達スクリーニング検査

—JDDST と JPDQ—

W.K. Frankenburg 原著

上 田 礼 子 著

東京大学保健学科

慶応大学医学部

リハビリテーション科

千 野 直 一

このたび上田礼子博士による日本版デンバー式発達スクリーニング検査 (JDDST) が完成し、小児発達に関する検査書としてまとめられた。著者の上田先生は東京大学保健学科で長年にわたり小児の成長発達を研究され本書を完成するにいたった。

本書は「デンバー式」とあるためややもすると訳本とまちがえられそうであるが、実際には、Frankenburg 博士が米国デンバー市で1,036名の小児の正常発達を調査したデータをもとに上田先生が日本の東京、沖縄、岩手の2,513名の子供を対象にして都会性、気候性因子による正常発達のちがいなどについての研究調査をまとめられた原著である。このことは研究対象数、調査法などよ

りなる本書の第一部「マニュアル」につづく第2部の「日本版の標準化」をよむことによって理解される。また、第3部の「プレスクリーニング用質問」は、JDDSTをより実用的に簡便にしたものである。

本書が小児の医療育成の分野でどれだけ有用であるかについて言及するには紙面が少なすぎるが、その一部に言及してみよう。小児のリハビリテーションにおいて最も重要でかつ難しい問題は、小児の発達が正常か異常かを判定することである。ことに一歳未満の乳児にあっては発達遅滞の診断は困難をきわめ、境界線上にある子供に対して“脳性小児麻痺”の診断を行ない、両親を奈落の底に落しめたり、また、研究者独自

の発達基準により判定した結果、“脳性麻痺の90数%が〇〇〇法の治療で治った”という信じがたい報告がでてくることにもなりかねない。

今まで本邦で用いられた発達検査法は多くあるものの、データが古いことや評価法の信頼性に乏しいことなどから十分信頼出来るものではなく、JDDSTが今後の日本の医療のなかではたす役割ははかりしれないであろう。

上田先生に敬意を表するとともに本書がリハビリテーション医療関係者や小児科領域の方々に最大限に活用されることを願ってやまない。

(B5版, 110頁, 1980, ¥2,500
医歯薬出版株式会社 発行)